

邪馬台国の言語

『長田夏樹論述集（下）』第20章

（原載：『伝統と現代』第26号，1974年3月；『歴史読本』第273号，1977年8月）

この論文は、『伝統と現代』26所収の「邪馬台国の言語」と『歴史読本』273所収の「邪馬台国をめぐる言語10の知識」の二篇を一つにまとめ、一部内容を補訂したものである。この論文は六つの節よりなる。

第1節は邪馬台国の言語を論じるための前提として、比較言語学の有効性および倭国語と上代日本語との継続性を論じる。第2節は『魏志』成立の言語的背景から『魏志』は洛陽古音で記述されたとし、洛陽古音では中古模韻相当韻の音価が *a* であったと述べる。第3節は訳音を洛陽古音によって示した後、倭国語の音韻的特徴について論じる。倭国語のサ行音を *[s]* であったとし、上代日本語で『日本書紀』の歌謡が *ts* 方言、大宝二年の筑紫籙帳が *s* 方言であることから、倭国語が畿内 (*ts* 方言地区) で話されていた可能性は少ないと述べる。また卑弥呼の読み方は「ヒムカ」であり、卑弥呼の出自は九州との考えを示す。第4節は倭人伝中の地名の読みをカタカナで示す。対馬・一支・奴・不弥の副官の名称「卑奴母離」はヒナモラと読むことを論じる。「卑奴母離」の「離」をラと読むのは洛陽古音で *lia* と推定することによる。また、匈奴や突厥に見られるような三官制を採る国が多いことも指摘する。第5節は「爾支」が伊都国の王を表す名称で、『史記』「朝鮮列伝」の「尼谿」に関係ありとする。第6節は日本語と朝鮮語における「鉄」を表す語を例に、邪馬台連合諸国と朝鮮半島との密接な関係を論じる。

この論文では、倭人伝中の訳音の具体的な読み方が明確にカタカナで示されている。長田先生の読み方は一般的に知られている読み方と異なるものが少なくない。これは上古魚部をア、支部のうち中古支・齊韻へと変化するものをイ、脂部をウとした上で、漢語側での所属韻部が同じであれば倭国語側で常に同じ母音を表すとの作業原則に従って復元されたからである。なお、「卑弥呼」の「弥」を「ム」と読むのは、上古で同じ脂部に属する「伊」がサンスクリットで在家信者を意味する *upāsaka* の *u* に対応（全体の音訳は「伊蒲塞」、一般には「優婆塞」と書かれることが多い）することからの類推のみに基づくものである。この点は注意しておく必要がある。

その後『魏志』倭人伝訳音の音価を中国語音韻史の側から論じたものとしては、森博達氏の「倭人語の音韻」（森浩一編『倭人伝を読む』，中央公論社，1982）、「倭人伝の地名と人名」（森浩一編『日本の古代1 倭人の登場』，中央公論社，1995）などがある。（橋本貴子）